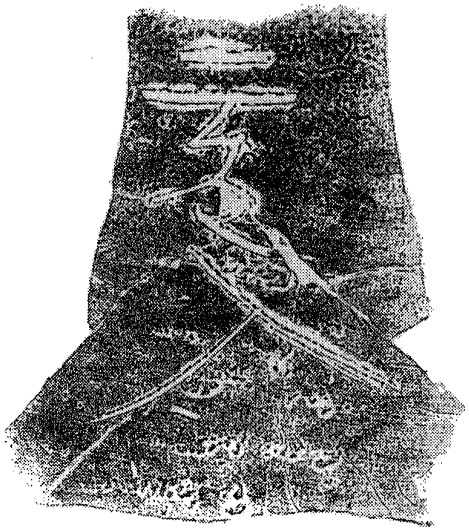
山 科 本 願 寺 跡

発掘調査現地説明会資料



「二石入」備前焼大甕

1997年６月７日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

山科本願寺跡発掘調査現地説明会資料

所在地　　京都市山科区西野左義長町

調査期間　　1997年３月26日～継続中

調査面積　　約900㎡

調査主体　　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

１　はじめに

山科本願寺跡は山科盆地の中央部、山科川西岸に位置する。文明10年（1478年）本願寺八世蓮如兼寿上人（れんにょけんじゅしょうにん）によって造営された寺内町は、文明15年（1483年）に、その主要な施設を完成させている。山科本願寺は、「御本寺（ごほんじ）」「内寺内」「外寺内」の三つの郭から構成され、その規模は南北１km、東西0.8kmおよそ30ヘクタールに及ぶと推定されている。本願寺の全盛期は寺内町の経済的発展によって支えられていたが、造営52年後の天文元年（1532年）８月に細川晴元率いる法華宗・延暦寺宗徒・近江守護職六角氏の連合軍によって総攻撃され主要な建物は焼失した。寺域内には土を高く積み上げた土塁や堀をめぐらす防御施設を備え、現在でもその一部がわずかながら残っている。1973年に山科寺内町遺跡調査団によって行われた寺内町の発掘調査では、堀や土塁・寺内の井戸・石室などがみつかっているが、山科本願寺のごく一部の様子がわかっているにすぎず、正確な寺域や寺内の建物の配置などはわかっていない。

今回の調査地点は、山科本願寺を囲んでいた一番内側の土塁と堀の南西隅に位置し、現在でも土塁や堀跡を示す一部が残っており、通称「おちり」と呼ばれる地点にあたる。調査区は土塁の東側に第１調査区、北東部に第２調査区を設定し、さらに西側の土塁に伴う堀についても一部調査した。

２　調査の概要

＜堀と土塁＞

第１調査区の西および南側には、現在も堀の痕跡が残っている。この堀は東西方向の土塁にともなう堀から延長し、この部分で鍵型に曲がってさらに東へ

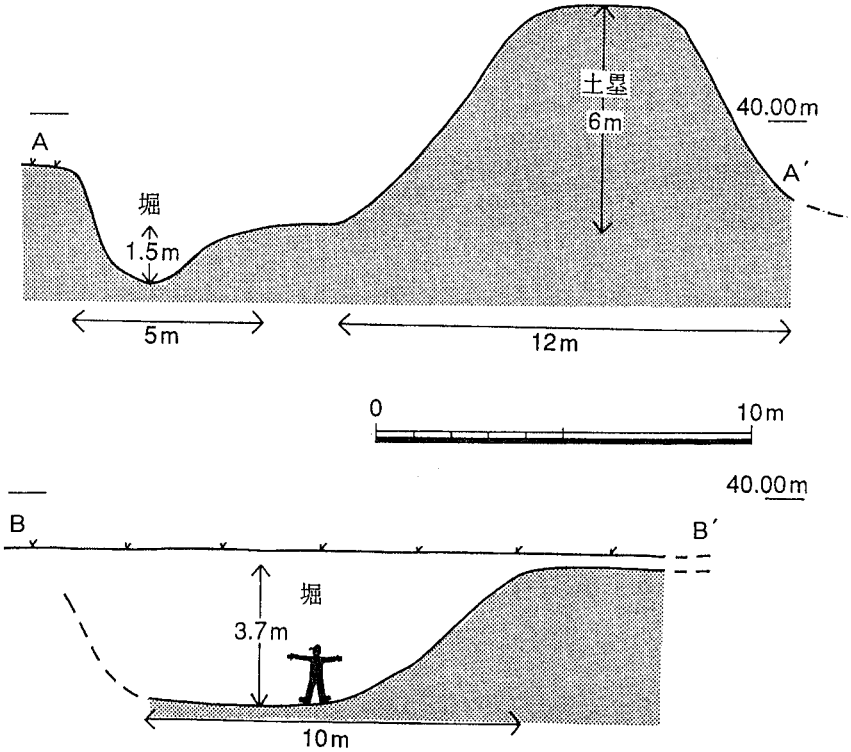


図１　土塁と堀の断面模式図

と延びる。このうち西側の堀は、山科本願寺のあった時期には現状よりかなり大規模な堀であったことがわかった。西肩口は調査区外にあたり検出できなかったが、幅９ｍ以上、深さ約４ｍの規模の堀を確認できた。この南北方向の堀は、西側の土塁の東西方向の堀と比べると幅・深度ともに大きく造られていた。

土塁の痕跡は、第１調査区の南側で確認した。土盛は削られて地表面には残っていないが、基底部分の土を積んだ痕跡を調査区東壁で観察することができる。第１調査区南半部では、建物跡などほかの遺構は検出しなかったことから、この部分には東西方向の土塁があったと推定している。

＜建物跡（甕倉）＞

第１調査区北半部では建物跡を１棟検出した。建物規模は南北14m、東西４ｍで南北に長い建物である。建物の北側には胴の直径約80cm高さ約90cmもある大きな甕（かめ）を９個並べて埋設していた。これらの大甕はいずれも備前焼で、肩部外面に「二石入」とヘラ書きしたものも出土している。甕の内容物については現段階では不明であるが、中世の絵画資料や民俗例では、こうした大甕が穀物

や酒・油などを貯蔵するのに使用されている。埋め甕の南側には束石(つかいし)が残っているため、床を張った建物と思われる。また、建物は焼けた壁土や炭で埋まっており、床面の一部には赤く焼けた跡がみられることから、この建物が火災で焼けたことがわかった。この焼土層から16世紀初め頃の土器が出土したことから、山科本願寺が天文元年（1532年）に焼き討ちされた時に焼け落ちた建物跡と考えられる。このような甕倉の検出例としては和歌山県根来寺坊院跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡などがある。

＜その他の遺構＞

第１調査区の北半部では建物跡のほかにも土壙(どこう)、溝、柱穴など多くの遺構を検出した。このなかにも埋土に焼土を多く含むものがある。調査区の南東部でも建物の柱を支える根石を検出したが、現在のところ建物の規模などは不明である。また北半部の建物の東側には落ち込みがあり、これは建物南側の東西方向の溝までつながっている。さらにこの東西方向の溝の西端は、堀まで延びる。東側の落ち込みが溝であることは確認していないが、おそらく建物を囲むようにして溝が巡っていたと考えられる。東西溝には護岸の石垣が積まれているが、部分的に抜き取られている。溝内から石仏が１体出土した。

第２調査区からは、建物に伴う土間（石敷）と井戸を検出した。土間は小石と砂を用いて作られ、堅く踏みしめられている。柱跡も数箇所で確認したが、建物の復原はできていない。井戸の規模は直径約４ｍ、深さは完掘していないため不明である。石組みなどの施設はなかった。これらの遺構も出土した遺物の時期から、堀や埋め甕をともなう建物跡と同様、山科本願寺に関係するものと思われる。

＜出土遺物＞

第１調査区からは、土師器・瓦器・陶磁器・瓦・備前大甕・信楽甕・石臼・寛永通寶などが出土している。堀の遺物には漆器椀・曲げ物・箸・下駄・牛馬や人の骨・瓦・焼締(やきしめ)陶器などがある。

第２調査区からは、土師器・瓦器・陶磁器・瓦・信楽甕などが出土している。

3　まとめ

山科本願寺は文献史料や現存する古絵図などから、土塁と堀により寺域を囲い、「御本寺」「内寺内」「外寺内」の三箇所に区画されていたことが知られている。今回の調査地点を、古絵図と比較してみるといずれも一番内側の郭、すなわち「御本寺」の南西隅にあたることは間違いないようである。なかでも「山科古図」（洛東高校所蔵）では、この部分の堀が鍵型に曲がり、他と比較して広く描かれている。実際に調査でも第１調査区東側では規模の大きな堀を検出しており、この古図が調査区付近の堀の様子をよく示しているといえる。

ところで調査区の西側には今でも土塁が残っているが、これがどのように東へと延長していたのかは、どの絵図をみてもはっきりとは描かれていない。調査の結果、第１調査区南半部には東西方向の土塁があったであろうと推定することができた。しかし北半部では、建物跡を初め山科本願寺の時期の遺構を多数検出していることから、現存する土塁から堀にそって土塁があったとは考えられない。おそらく、この部分には土塁はなく開放された状態であったと推定できる。そしてこの開放された部分については、かわりに広く深い堀を作り、防御性を損なわないよう配慮したのではないかと考えている。

今回の調査では、山科本願寺に関係する多くの遺構を確認することができた。なかでも現存するものも含めて、調査区付近の土塁と堀の様子が明らかになったこと、山科本願寺跡では初めて明確な建物跡を検出し、それが埋甕を備える特殊な建物であったこと、天文元年（1532）の焼土層を確認したことは大きな成果である。広大な寺域を有した山科本願寺において、わずかな面積の調査であるが、今回の調査成果は山科本願寺を復元するにあたって貴重な資料となる。

山科本願寺関係略年表

1415年（応永22年）七世存如の嫡子として蓮如生まれる。

1457年（長禄元年）蓮如、本願寺八世宗主となる。

1471年（文明３年）蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。

1475年（文明７年）蓮如、越前吉崎御坊を去る。

1477年（文明９年）応仁、文明の乱終わる。

1478年（文明10年）山科本願寺の建設始まる。

1480年（文明12年）御影堂が落成する。

1488年（長享２年）加賀一向一揆おこる。

1497年（明応６年）大坂石山坊舎建設。

1499年（明応８年）３月25日蓮如没す、85才。

1525年（大永５年）九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。

1532年（天文元年）８月24日、法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。

1533年（天文２年）証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。

1536年（天文５年）７月、天文法華の乱。

1570年（元亀元年）織田信長との石山合戦開始。

1580年（天正８年）本願寺証如、信長と和睦。石山本願寺退去。その後、紀伊鷺森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。

1586年（天正14年）豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。

1591年（天正19年）本願寺、京都七条堀川（現西本願寺）へ移転。

1602年（慶長７年）東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。

1716～1736年（享保年間）東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

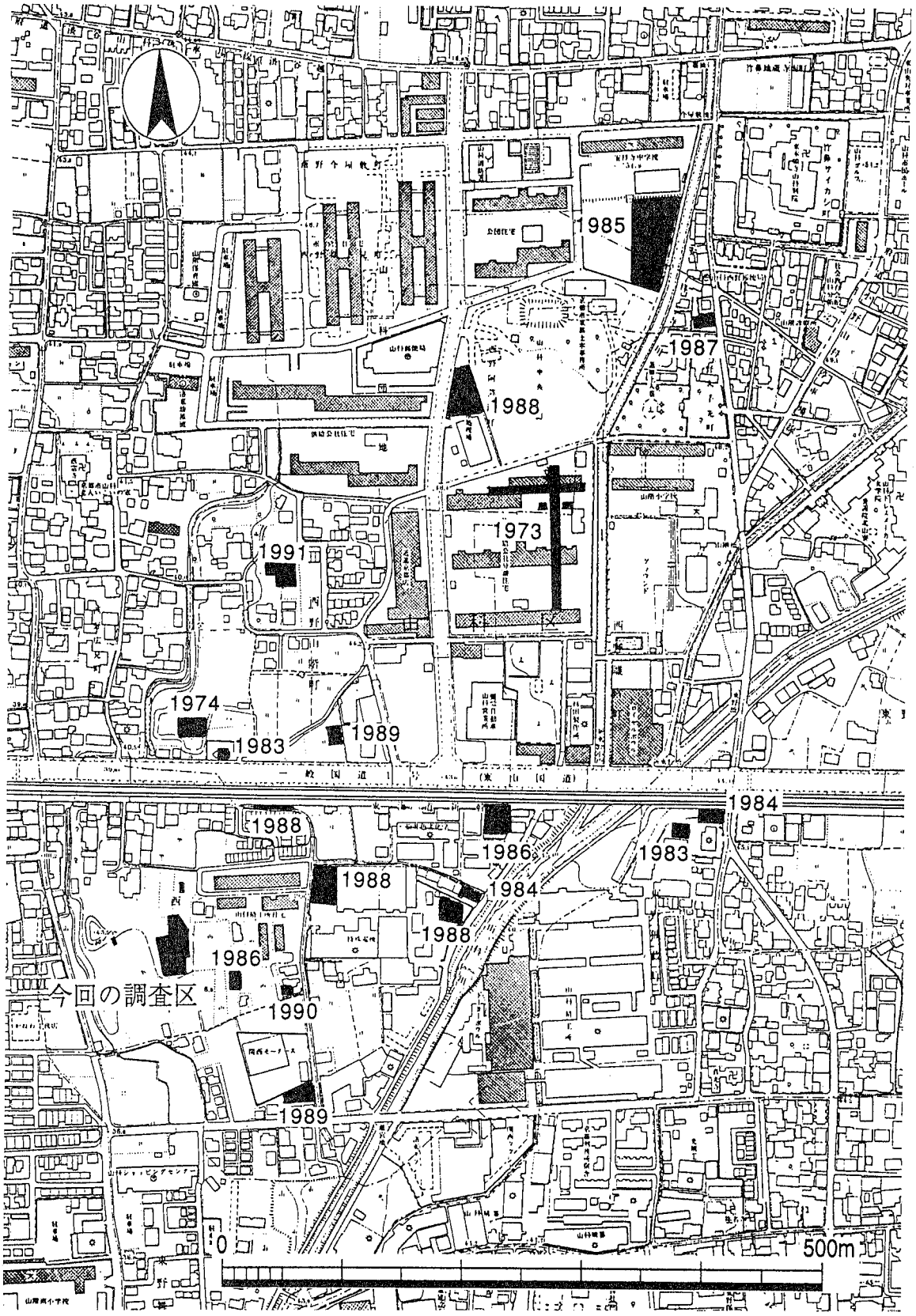

1985
1987
1988
1973
1991
1974
1983
1989
1984
1988
1986
1983
1988
1984
1988
1986
今回の調査区
1990
1989
0
500m

図２　調査位置図

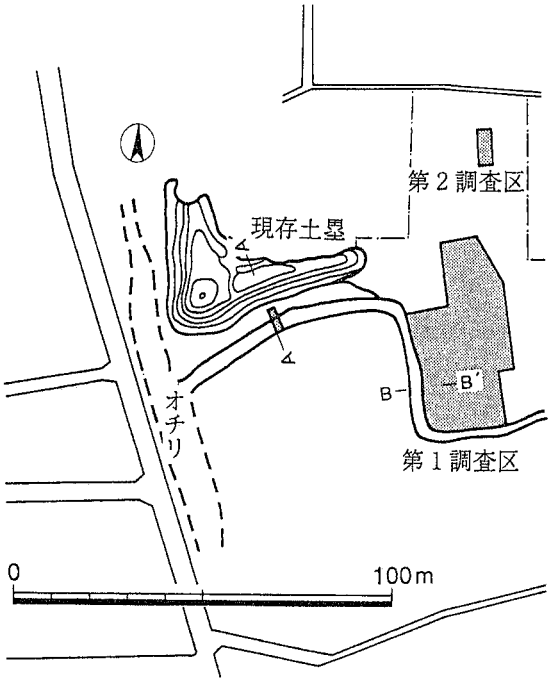
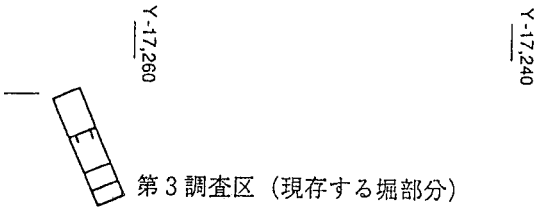
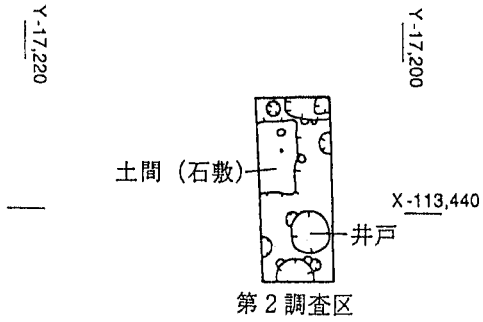


図３　調査区配置図





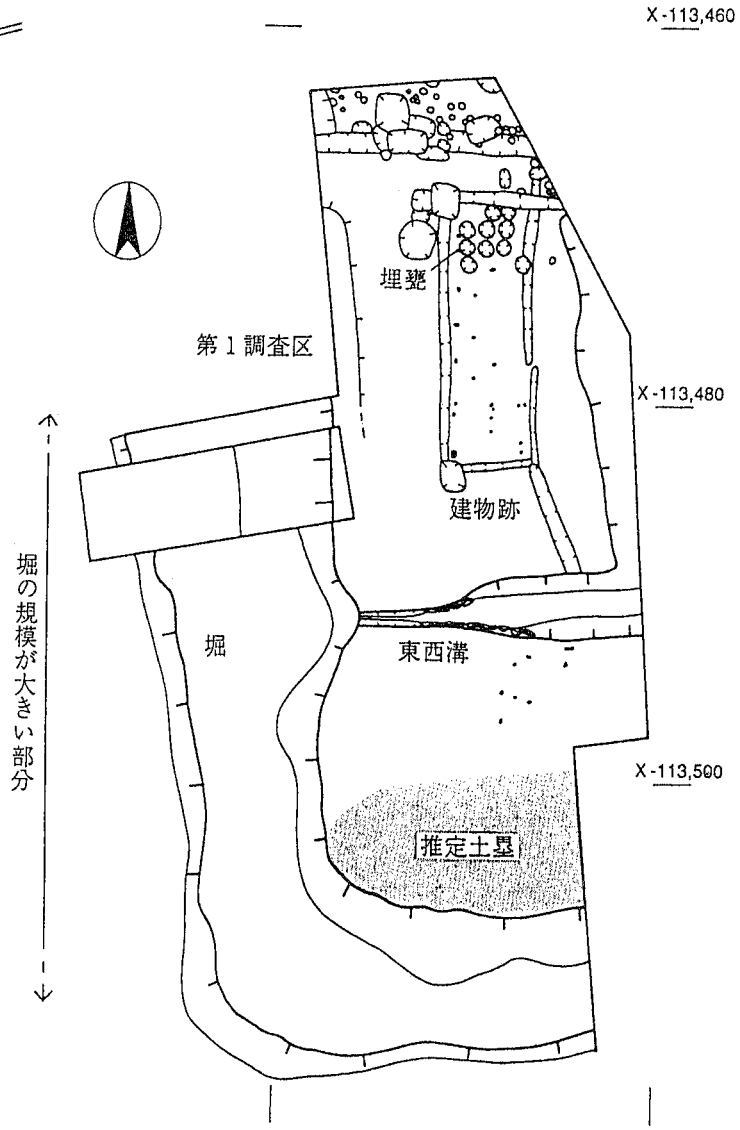


図４　調査区平面図

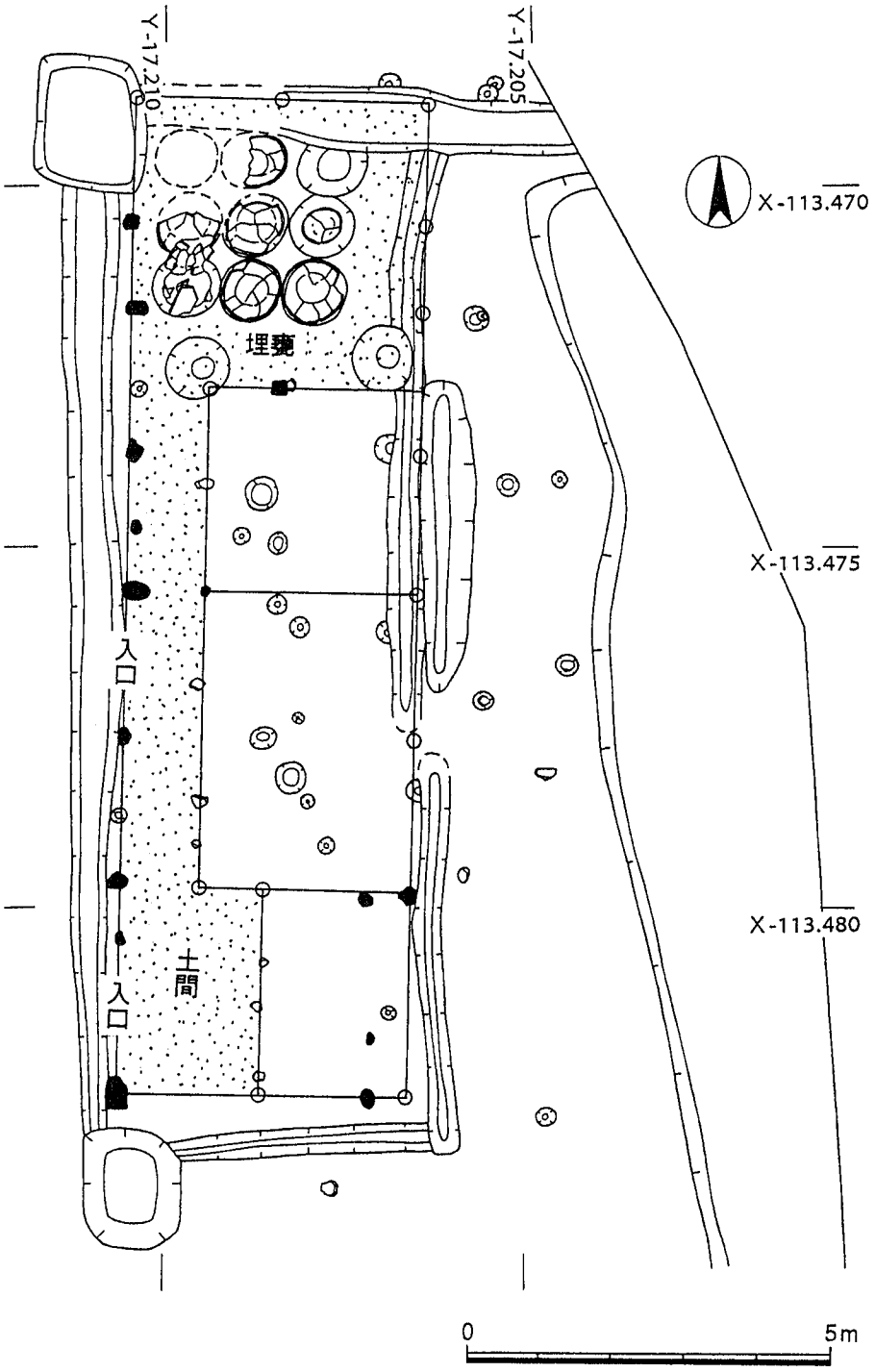


図５　建物跡平面図

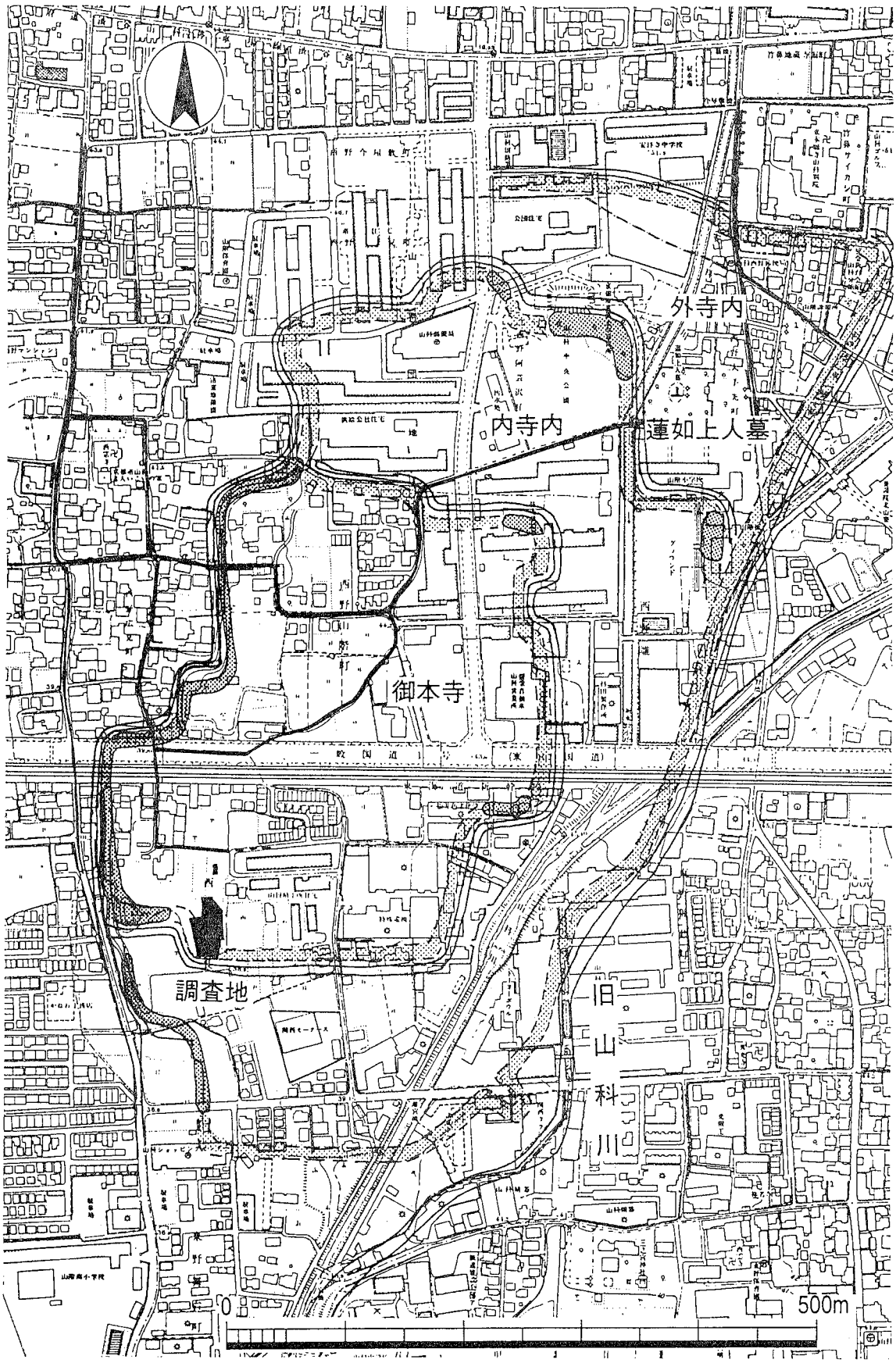
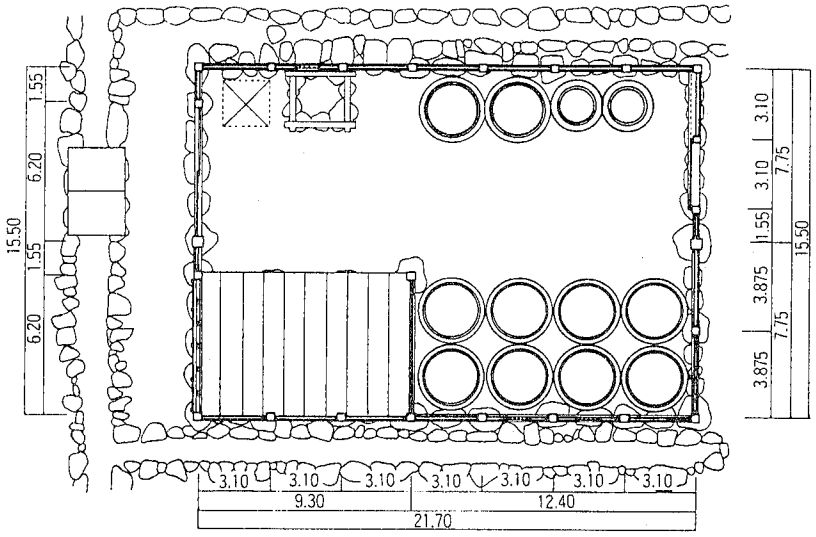
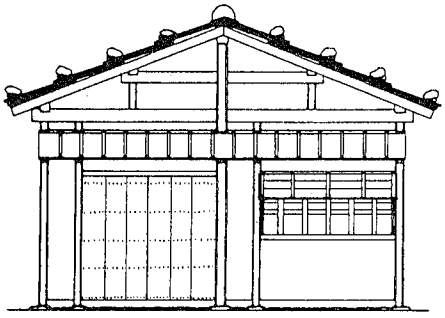


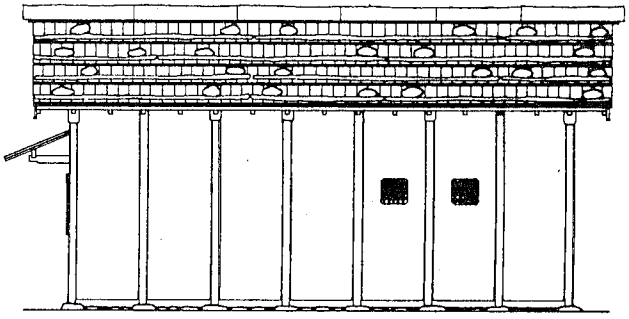
図６　山科本願寺跡復原図



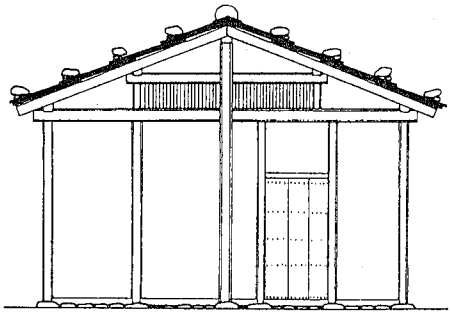
平面



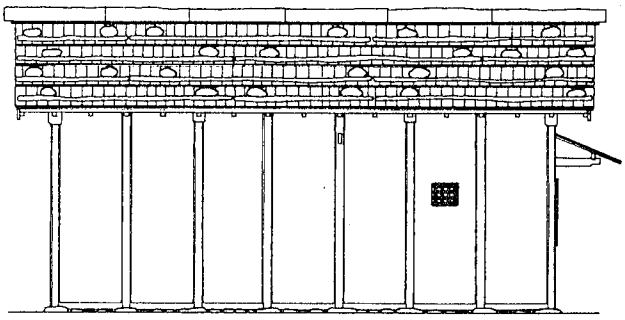
正面（西）



側面（南）



背面（東）



側面（北）

図７　福井県一乗谷朝倉氏遺跡の建物復原図（参考資料）

写真１　山科本願寺跡航空写真（南から）

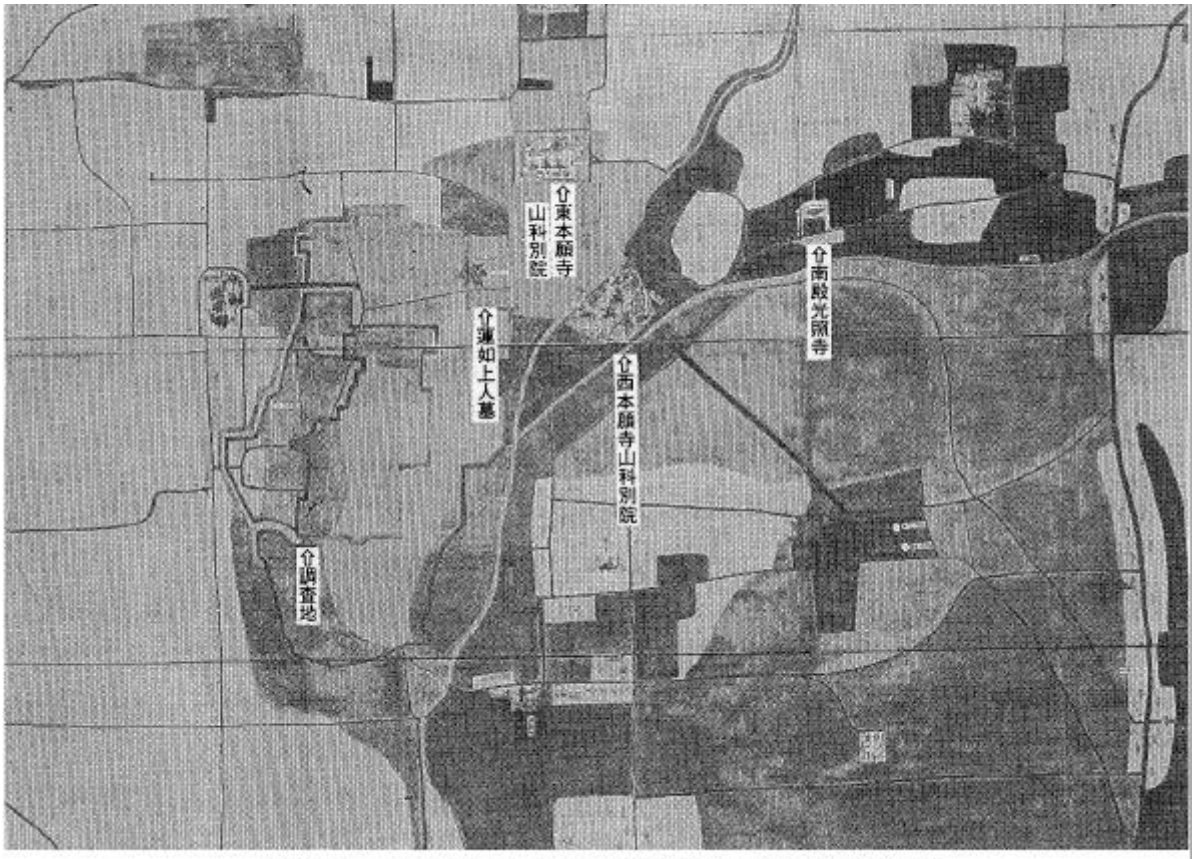


写真２　山科古図（京都府立洛東高等学校所蔵）

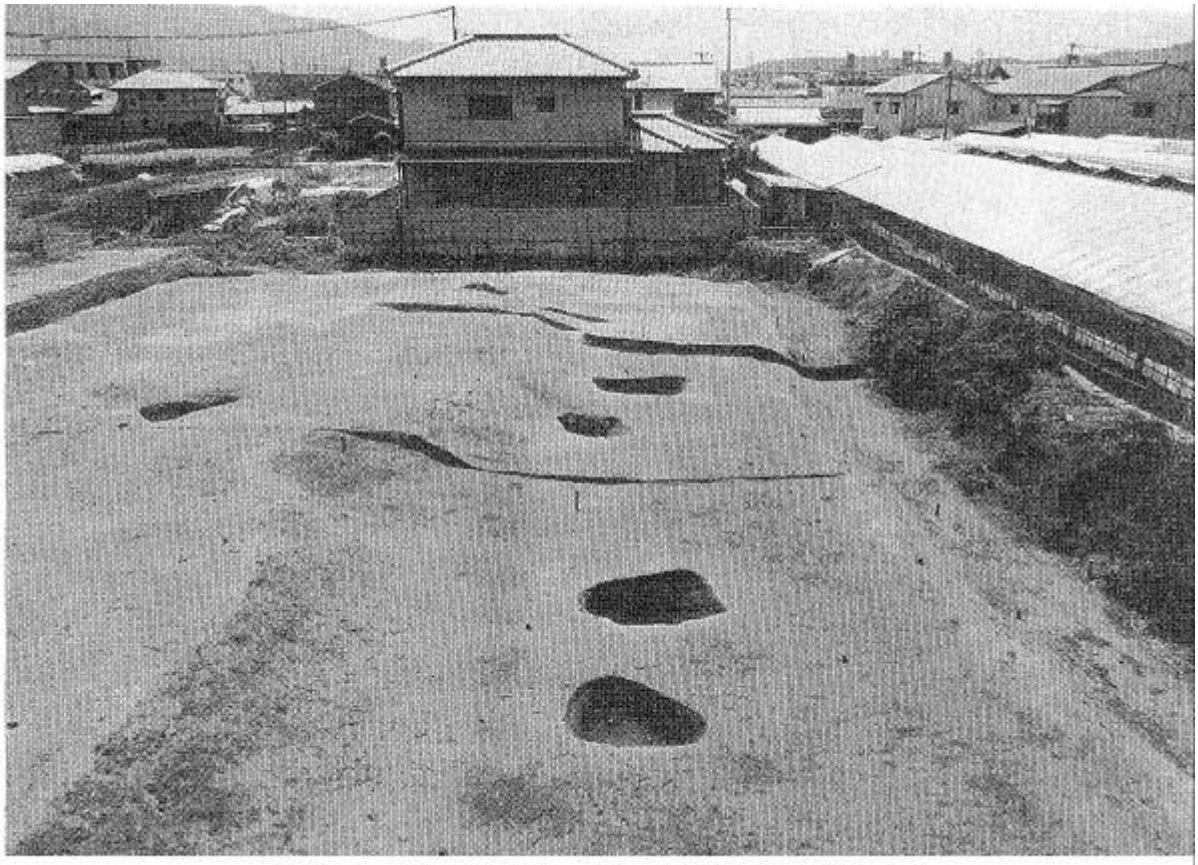


写真３　第１調査区　堀の最終段階（北から）

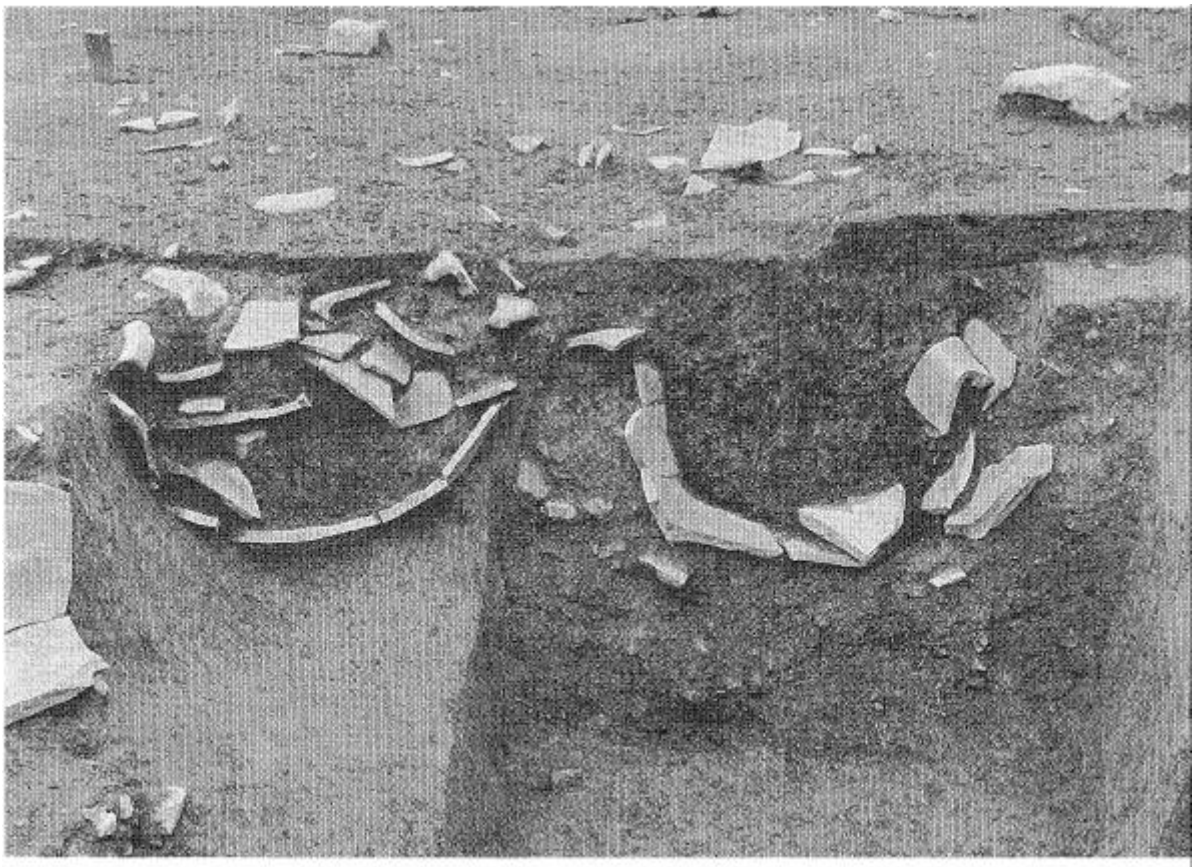


写真４　第１調査区　埋甕の断面